

詩でない我が実存の詩（二）

リアリティ
ー実存・事實は詩を超えるー

今村 徹

「百済観音」法隆寺蔵



文字を知らなければ詩人にはなれないのでしょうか。

「詩でない実存の詩」は文字の否定です。

無学文盲の人にこそ、真の詩があるのです。

詩は感動であるとすれば、表現しようが、すまいが、

この感動、慟哭、悲泣の中の、特に、生の、愛の感動、

この感動は、学の有無、文字の表現には関係しないのです。

表現の技術、それは表現のプロに任せればよいのです。

表現できなくても、感動を大事にすればよいのです。

感動喪失の現代人、愛の感動においての老いの皺の発見、

愛のない人には醜、愛ある人には美として輝くのです。

愛の文字はなくとも、愛の輝きの感動があればよいのです。

その人は、「発見、感動においての詩人」、私の真意です。

ミケランジェロ 「ピエタ」



ロダン 「接吻」



比較すな 悲苦喜の我に お陰あり

歡喜の生に 文字は要らず

詩でない我が実存の詩（二）

今村 徹

― 実存・事実は詩を超える ―
リアリティ

時空超ゆ

祈りの文字 もんじ 生の文字 なま もじ

なみだ 悲涙しながら 妻亡き我の

詩でない我が実存の詩（二）

リアリティ
ー実存・事実は詩を超えるー（非売品）

いまむら とおる

今村 徹 略歴

1926年11月 福岡県北九州市門司区に生まれる
1950年 8月 専門学校入学資格検定試験（専検）合格
同 年年11月 大学入学資格認定試験（大認）合格
1958年 3月 慶応義塾大学通信教育部哲学科卒業
1983年 3月 仏教大学通信教育部専攻科仏教学修了

1953年11月 福岡県門司市役所に入所

1984年12月 北九州市役所を退職

卒業論文 「カントにおける自由の問題」

修了論文 「『教行信証』と華嚴思想」

著書 『わがケースワーク・わが実存』（自費出版 頒価）

『愛と労働と生』（自費出版 非売品）

『生きるということ』（同 上）

『死と生』（同 上）

『愛と死と実存』（同 上）

『詩でない我が実存の詩』（一・二・三輯）（同 上）

『我が求道』（同 上）

1999年9月15日発行

現住所 〒801-0831 北九州市門司区丸山1-21-6

TEL 093-331-1212

まえがき

人生は苦です。四苦八苦です。この苦は苦楽の苦ではありません。楽もまた苦なのです。それは、人生が無常であるからです。無常は決して不幸をもたらすものではありません。昨日の不幸が今日の幸福ともなります。逆に、昨日の幸福が今日の悲惨ともなるのです。愛する者との幸福な生活が、幸福であっただけに、悲惨を深めるのです。「栄枯盛衰は世の慣い」ともなるのです。国家、民族、氏族もまたそうでした。無常の人生であることは誰でもが知り、感じています。今さら言う必要もありません。しかし、この自明のことを本当は知らず、気がついてもないのです。無常に目覚めてはいないのです。だから、その感動がないのです。

生物は時間の中にあります。生まれ、死んで行くのです。「形あるものは必ず滅し、生あるものは必ず死す」のです。必然の法則、それなのに、何故に人は死を恐れ、死を避け、死を悲しむのでしょうか。私は若い日から、この問いを出して来ました。この問いの解決を求めて、哲学を、宗教を学んで来ました。「死の準備」としての哲学でありたかったです。宗教も死を抜きにしては成り立ちません。ですが、私は一体何を学んだのでしょうか。「死の準備」など可能なのでしょうか。

「武士道とは死ぬことと見つけたり」の「葉隠」の有名な言葉があります。主君のためには、いつでも死ねる覚悟がなくてはならぬのです。国家のために死ぬことを命ぜられた特攻隊員は、これより以上であつたでしょう。死をこのように「覚悟」として受け止めねばならない世の中そのものがおか

しいのです。このような死の準備も、覚悟もいらない現今の日本であってよいのです。戦争のない平和な国であり続けなければなりません。戦争という大きな流れの中に個人が巻き込まれれば、それから出ることは出来ません。最低生活の保障どころか、生命の保障さえしないのです。生命を保障しないどころか、死をも命ずるのです。この二つを保障しない国家ならない方がましなのです。権力闘争に明け暮れる国家、倫理なき国家のために、何故ただ一つしかない生命まで投げ打たねばならないのでしょうか。

人生は苦と、この二つ、最低生活の保障、戦争の否定とは、全く別問題なのです。戦争を起こしながら、人生は苦、どうせ死ぬのだから、「生命を投げ捨てて国家を守れ」、の論法に騙されてはなりません。「国の大義に殉ずる」ために、敵艦隊に体当たりした特攻隊員の気持ち、私と同年齢の若者、死を考える時は考えざるを得ません。福祉事務所のケースワーカー在職時に、手こずらせている特攻崩れを担当したことがあります。複雑な気持ちでした。「俺は十代で死んだのだ、後の俺の残骸は国家が保障して当然なのだ」、と涙しながら、戦友との別れの悲しみを訴えていました。「俺は十代で死んだ」の叫び、戦友は、親、兄弟以上だの叫び、あの境遇にあっては、これは本当なのです。

「死の準備」という言葉を聞くと、死ぬための訓練ばかりをさせられた、あの特攻隊とがどうしても結びつくのです。戦時に病弱であった私の負い目でもありました。

ケースワーカーの職務を通して、他の死について考えさせられた強い印象は、無縁墓地に葬られた人たち、それは、自業自得の人たちの方が多いかもしれませんが、中には善良で働き者でありながら、身内なく、誰も見取る者もなく、無縁墓地にしか行き場のないかわいそうな人たちも居ることです。

死んでしまえばどうでもよこと、と言えばそれまでです。肉親があらながらも、この無縁墓地に葬られる人たちも案外いるのかもしれない。死後はどうでもよいとしても、生前の生活、何のために生まれて来たのでしょうか。このような老人はよく孤独を訴えていました。この無縁墓地に葬られる人たちは、生まれ落ちた時、その時に既に決定されている感を深くしました。それに比べれば私自身の恵まれた環境に感謝したのです。

「蛙の子は蛙の子」は、福祉事務所にとっては悲しい言葉です。二代、三代に渡って生活保護を受給している家庭もあるのです。社会や、制度にも問題はありますが、根本において教育の問題があるやような気がしてなりません。余りにも貧困に育ち、人の顔色ばかりを見て育つと、人の善意も曲解することが、多々あるのです。怠惰な生活は怠惰に胡座あぐらをかきたくなるのです。人間の弱さなのです。私自身がそうであるからです。だからこそ、普通であれば、人生を、親を呪うであろう生涯でありながら、親に感謝し、人さまに感謝し、生活保護を受けて、今が一番幸福と感謝するお年寄りに、私は脱帽したのです。ごくごく希なケース、でも、あるという事実があるのです。学の有無には関係ない、鋭敏な道徳感覚の持ち主なのです。遺伝とも環境ともいえない、それを超えるものがあるような気もするのです。かかる人は信仰を持っている人が多かったのです。死についても従容として受け入れていました。特別に「死の準備」など、この人たちには必要はないのです。常に他に感謝の気持ちで生涯を送れたら、利他の精神の強い人であれば、死もまた感謝で迎えることが出来るのだ、とは私が若き日から思ってた来た「死の準備」の一つではありました。

人生は苦、人生は無常、死についても本気で考えて来ました。母の死も私に死に方を教えてくれま

した。それなのに、妻美奈子の死は、私から一切を奪いました。「死の準備」の如何に無力であるかを、私だけでありましようが、痛感したのです。この苦しみ、悲しみを与えるものは何か、それは、愛が深いから、と思うと、より救いなきを感じるのです。愛の深さが、私を自滅させるかもしれないの戦き、気が狂うか、病気になるかもしれない不安、妻を亡くして直ぐ、妻の後を追った事例は私の間近にもあります。そうならないために、哲学を、宗教を求めたはずなのに、の無力感、妻の死を予告された動転は、「死の準備」に無関心であった人以上でした。

妻の死が私の寿命を縮めてもよいのです。しかし、その悲しみに打ち負かされて、気が狂ったり、寿命を縮めたのでは、私をここまで育て、生かしてくれた「お陰」に申し訳ありません。妻美奈子も喜びません。会話の中では「前後して死のう」とは言っていました。それは真意ではありません。私たちの愛の表現なのです。生きて愛を表現することが愛する者への謝念となるのです。それで「挽歌（一）」を書きました。「挽歌」は詩である前に、私が私の救いを求めた文字なのです。『詩でない我が実存の詩』も、最低生活を保障され、平和な日本に感謝しながら、『挽歌』の編曲、延長上にある文字、美奈子への菩提の弔の文字です。生前は何もしてやらなかった私の、死後の菩提を弔うの気持ちの表現なのです。それはまた、求道の継続の決意でもあるのです。美奈子が、他に何も出来ない私によく、「それしかない」と言った、「それ」の継続でもあるのです。

他者の救済のためではなく、自己の救いの自著、エゴイストの私、ただそれが、自己究明の求道でありたいのです。直接的、積極的には他者のために何も出来ない私の消極的、実存への求道、一人の中に人類があるからです。本書もまた求道としての「愛と死と実存」が主要テーマなのです。

美奈子も平凡な母親にすぎません。平凡な母親の中に「母性的なるもの」が輝くのです。美奈子の中に全人類の母親を代表させてあるのです。美奈子より以上に「母性的なるもの」を発揮している女性はい多いのです。この「女性的なるもの」こそ、男性が努力を要するものを、女性は努力を要せずの素質があるのです。この素質こそ、女性の女性たる所以なのです。現今では、男性を、美に、正道に導くこの「母性的なるもの」が、女性から影を薄めているような感じがしてなりません。「母性的なるもの」は、社会体制や、制度とは無縁ではありませんが、本質的なものではありません。時空を超えてあるのです。私の「挽歌」は、この「母性的なるもの」への賛仰でもあります。ここで母と連続するのです。「母性的なるもの」の源泉は大地なのです。「母なる大地」なのです。

「大地」は比喩、象徴、そして最も具体的なものなのです。太陽を「お天道さま」と拝み、大地を耕作する農民の姿、そこに自然への感謝と感動があります。大地の愛の体感なのです。文字で表現しなくとも、この農民は、「発見においての詩人」、自然は詩となり、詩の読解が合掌となります。農地も「大地」ではなく、単なる財となってしまうのでしょうか。大地の喪失が「母性的なるもの」の喪失にも通ずるのです。農村女性の解放、農村的封建制度の因習の批判が、即「母性的なるもの」の追放でないことを願わずにはいられません。すべて古きものは悪とはかぎらないのです。時空を超えての善きものの発見の感動、表現の詩人ではなく、発見、感動においての「詩人」となるのです。無学文盲でも「詩人」となれるのです。その詩は無名の、無言の発見の「詩」なのです。

一九九七年七月

目次

詩でない我が実存の詩（二）

― 実存・リアリテイ 事實は詩を超える ―

序章 艶ある詩 艶消しの詩でない実存の詩

― むつまじき老夫婦の皺こそ愛のかがやき 刻印 ―

- | | |
|---------------------|----|
| （一） 生命の躍動 芸術 表現 | 三 |
| （二） 美と詩と詩人 | 一四 |
| （三） 離美、詩人、実存の詩 | 二五 |
| （四） 老いの皺こそ 詩でない実存の詩 | 三七 |

本篇 詩でない我が実存の詩

一 「母性的なるもの」と詩でない実存の詩

(一) 美奈子との死別満三年と我が女性観……………五五

(二) 「詩的メモ」から「詩でない実存の詩」へ……………六一

二 短詩……………八七

三 長詩……………二四七

あとがき……………四〇一

詩 目 次 (二)

挽 歌 (三) 以降短詩

- (01) 妻明日三回忌 八九
- (04) 法事後 (01) 八九
- (07) 造花 (02) 九〇
- (10) 追想 九〇
- (13) 歩行 九一
- (16) 度船 九一
- (19) 朝散步 九二
- (22) 泣け 九二
- (25) 遺影 九三
- (28) 風呂洗い 九三
- (31) 無力 九四
- (34) 責務感 九四
- (37) ICU 九五
- (40) 読手なき自著 九五
- (43) 自涙の自著 九六
- (46) 照明器具 九六
- (49) 隠徳 (02) 九七
- (52) 至福 九七
- (02) おんぶ 八九
- (05) 法事後 (02) 八九
- (08) 今日 九〇
- (11) 病院にて 〇九
- (14) 強者 九一
- (17) 噴水 九一
- (20) 終盆 (01) 九二
- (23) 戦争 九二
- (26) 盆花 (01) 九三
- (29) 叔父入院 九三
- (32) 負担 九四
- (35) 我への愛 九四
- (38) 時流 九五
- (41) 歩兵の自著 九五
- (44) 足跡の自著 九六
- (47) 老人の日 九六
- (50) 無縁仏 (01) 九七
- (53) 無欲 九七
- (03) わが過去 八九
- (06) 造花 (01) 八九
- (09) 女子高校生 九〇
- (12) 長寿 九〇
- (15) 二人目の孫 九一
- (18) 花火大会 九一
- (21) 終盆 (02) 九二
- (24) 特攻 九二
- (27) 盆花 (02) 九三
- (30) 伴院 九三
- (33) 無理 九四
- (36) 養女 九四
- (39) 反映 九五
- (42) 生と愛の賛仰自著 九五
- (45) 母の正月命日 九六
- (48) 隠徳 (01) 九六
- (51) 無縁仏 (02) 九七
- (54) 意欲 九七

(55) 希望 九八
 (58) 詫び 九八
 (61) 父の正月命日(01) 九九
 (64) 父の正月命日(04) 九九
 (67) 悲喜 一〇〇
 (70) 同上(02) 一〇〇
 (73) 父心(01) 一〇一
 (76) 父心(04) 一〇一
 (79) 死への旅 一〇二
 (82) 長男夫婦(02) 一〇二
 (85) 七五三(01) 一〇三
 (88) 名古屋駅 一〇三
 (91) 同上(02) 一〇四
 (94) 重荷の余生 一〇四
 (97) 死への覚悟 一〇五
 (100) 入替え 一〇五
 (103) 悟得 一〇六
 (106) 大衆 一〇六
 (109) 伏線 一〇七
 12 純潔(02) 一〇七
 (115) 時計の電池 一〇八
 (118) 柱時計(03) 一〇八
 (121) 旧式暖房器(02) 一〇九

(56) 二者 九八
 (59) 老女 九八
 (62) 同上(02) 九九
 (65) 同上(05) 九九
 (68) 待つ長男 一〇〇
 (71) 同上(03) 一〇〇
 (74) 同上(02) 一〇一
 (77) 嫁の料理(01) 一〇一
 (80) 亡妻の名 一〇二
 (83) 共荷夫婦 一〇二
 (86) 同上(02) 一〇三
 (89) 帰路 一〇三
 (92) また台所 一〇四
 (95) 我が死 一〇四
 (98) 我が喜び 一〇五
 (101) オウム教 一〇五
 (104) 世事 一〇六
 (107) 白と黒 一〇六
 (110) 状況 一〇七
 (113) カント 一〇七
 (116) 柱時計(01) 一〇八
 (119) 同上(04) 一〇八
 (122) 感謝 一〇九

(57) 失敗 九八
 (60) 仏花 九八
 (63) 同上(03) 九九
 (66) 整理箆筭 九九
 (69) 初孫の顔(01) 一〇〇
 (72) 同上(04) 一〇〇
 (75) 同上(03) 一〇一
 (78) 同上(02) 一〇一
 (81) 長男夫婦(01) 一〇二
 (84) 女のエゴ 一〇二
 (87) 赤べべ 一〇三
 (90) 帰宅(01) 一〇三
 (93) エゴの我 一〇四
 (96) 死の苦痛 一〇五
 (99) 園児 一〇五
 (102) 逆用 一〇五
 (105) 黒を白 一〇六
 (108) 売春婦 一〇六
 (111) 純潔(01) 一〇七
 (114) 親鸞 一〇七
 (117) 同上(02) 一〇八
 (120) 旧式暖房器(01) 一〇八
 (123) 暖愛 一〇九

- (124) 黒の白 一〇九
 (127) 被加害(02) 一一〇
 (130) 干物(01) 一一〇
 (133) 亡妻と対話 一一一
 (136) 無出幕 一一一
 (139) 意識なき従兄 一二二
 (142) 貧しき料理 一二二
 (145) 訃報葉書 一二三
 (148) 選挙民 一二三
 (151) 犬の糞 一一四
 (154) 文字
 (157) 罪業 一一五
 (160) 赤字店 一一五
 (163) 亡妻の年金 一一六
 (166) ケチケチ 一一六
 (169) テント中 一一七
 (172) 蛆虫 一一七
 (175) やさし言葉 一一八
 (178) 担当屋 一一八
 (181) 亡妻の月命日(03) 一一九
 (184) クリスマス(02) 一二九
 (187) 亡母の顔 一二〇
 (190) 無常の風 一二〇
 (125) 無名の我 一〇九
 (128) 天気予報 一一〇
 (131) 同上(02) 一一〇
 (134) 実存刻印 一一一
 (137) 学道 一一一
 (140) 次の食事 一二二
 (143) カロリー 一二二
 (146) 一家団樂 一二三
 (149) 勇者 一二三
 (152) 新回覧板 一二四
 (155) 蜂唸り 一二四
 (158) ボーナス 一二五
 (161) 社会の仕組 一二五
 (164) 家計(01)
 (167) 警沢抗議 一二六
 (170) 難民母子 一二七
 (173) 人命 一二七
 (176) 露店の老女 一二八
 (179) 亡妻の月命日(01) 一二八
 (182) 同上(04) 一二九
 (185) 年賀葉書 一二九
 (188) 我が生 一二〇
 (191) 亡妻追慕(01) 一二〇
 (126) 被加害(01) 一〇九
 (129) 仏花の水替 一一〇
 (132) 老体 一一〇
 (135) 生命の軌跡 一一一
 (138) 一隅 一一一
 (141) 貧の食事 一二二
 (144) 万里子の料理 一二二
 (147) 母の月命日 一二三
 (150) 庶民の隠徳 一二三
 (153) 亡母と亡妻 一二四
 (156) 生きもの 一二四
 (159) 百貨店
 (162) 貧の生活 一二五
 (165) 同上(02)
 (168) 我の外道 一二六
 (171) オウム教 一二七
 (174) 千円の投票紙 一二七
 (177) 高額の千円 一二八
 (180) 同上(02) 一二八
 (183) クリスマス(01) 一二九
 (186) 年末 一二九
 (189) 労災の待席 一二〇
 (192) 同上(02) 一二〇

(193)	油落し	一一一	(194)	正月花	一一一	(195)	老殘留孤児	一一一
(196)	大地の愛	一一二	(197)	大地の子	一一二	(198)	元旦の衣服	一一二
(199)	衣類	一一二	(200)	衣服	一一二	(201)	年末の疲れ	一一二
(202)	震災	一一二	(203)	大晦日	一一二	(204)	白餅(01)	一一二
(205)	白餅(02)	一一三	(206)	形式	一一三	(207)	正月三度	一一三
(208)	家風	一一三	(209)	重箱	一一三	(210)	着物羽織	
(211)	形型	一二四	(212)	一泊	一二四	(213)	黒豆	一二四
(214)	正月料理	一二四	(215)	兄妹対談	一二四	(216)	妹の愛	一二四
(217)	今年	一二五	(218)	我が詩(01)	一二五	(219)	同上(02)	一二五
(220)	食器洗い	一二五	(221)	泥沼	一二五	(222)	悪夢の刻印	一二五
(223)	白と黒	一二六	(224)	寒き部屋	一二六	(225)	節約	一二六
(226)	余生大事	一二六	(227)	母性なき女(01)	一二六	(228)	同上(02)	一二七
(229)	母性なき女(03)	一二七	(230)	仏花(01)	一二七	(231)	同上(02)	一二七
(232)	仏花(03)	一二七	(233)	御仏飯	一二七	(234)	蜂蜜	一二七
(235)	十五日	一二八	(236)	成人式(01)	一二八	(237)	同上(02)	一二八
(238)	成人式(03)	一二八	(239)	表裏(01)	一二八	(240)	同上(02)	一二八
(241)	後姿	一二九	(242)	無音ステレオ	一二九	(243)	造花づくり	一二九
(244)	ステレオと造花	一二九	(245)	洗濯予定	一二九	(246)	共亡妻	一二九
(247)	夫婦の刻印	一三〇	(248)	黄水	一三〇	(249)	寒夜	一三〇
(250)	亡妻飲器	一三〇	(251)	菩提日	一三〇	(252)	挙式日遺影	一三〇
(253)	久遠の思い	一三一	(254)	トンネル事故(01)	一三一	(255)	同上(02)	一三一
(256)	老少不定	一三一	(257)	家族の慟哭	一三一	(258)	男孫誕生(01)	一三一
(259)	男孫誕生(02)	一三一	(260)	初孫の嫁入り(01)	一三一	(261)	同上(02)	一三一

(262) 救えたきこと	一三三	(263) 孫達への祈り	一三三	(264) 亡妻と一緒	一三三
(265) 大樹(01)	一三三	(266) 同上(02)	一三三	(267) 同上(03)	一三三
(268) 遊戯る園児(01)	一三三	(269) 同上(02)	一三三	(270) 同上(03)	一三三
(271) 学ぶべし	一三四	(272) 誘笑	一三四	(273) 落涙(01)	一三四
(274) 落涙(02)	一三四	(275) 無縁仏	一三四	(276) ひとり	一三四
(277) 正義人	一三五	(278) 特許(01)	一三五	(279) 同上(02)	一三五
(280) 特許(03)	一三五	(281) 同上(04)	一三五	(282) 限度(01)	一三五
(283) 限度(02)	一三六	(284) 四十九日	一三六	(285) 仏壇	一三六
(286) ユーモア	一三六	(287) 雄弁	一三六	(288) 沈黙(01)	一三六
(289) 沈黙(02)	一三七	(290) 同上(03)	一三七	(291) 沈黙	一三七
(292) 沈黙(05)	一三七	(293) 同上(06)	一三七	(294) 言葉(01)	一三七
(295) 言葉(02)	一三八	(296) 揶揄予言(01)	一三八	(297) 同上(02)	一三八
(298) 長生き(01)	一三八	(299) 同上(02)	一三八	(300) 同上(03)	一三八
(301) 長生き(04)	一三九	(302) ニヒリズム(01)	一三九	(303) 同上(02)	一三九
(304) ニヒリズム(03)	一三九	(305) 超ニヒリズム(01)	一三九	(306) 同上(02)	一三九
(307) 超ニヒリズム(03)	一四〇	(308) マルクス(01)	一四〇	(309) 同上(02)	一四〇
(310) マルクス(03)	一四〇	(311) 同上(04)	一四〇	(312) 母親	一四〇
(313) 初公判	一四一	(314) 肉の泣き声	一四一	(315) 生命	一四一
(316) 茶一杯	一四一	(317) 思わず	一四一	(318) 煙織	一四一
(319) 端午の節句	一四二	(320) 郵送写真	一四二	(321) 宮参り	一四二
(322) 星光	一四二	(323) 一組に	一四二	(324) 浄顔	一四二
(325) 摂理の生命	一四三	(326) 賢治百年	一四三	(327) 天才	一四三
(328) 母子餓死(01)	一四三	(329) 同上(02)	一四三	(330) 同上(03)	一四三

- (331) 無縁仏 一四四
 (332) 義母の新聞切抜き(01) 一四四
 (333) 同上(02) 一四四
 (334) 義母の新聞切抜き(03) 一四四
 (335) つつじ咲く 一四四
 (336) 終輝の微笑 一四四
 (337) ここに亡妻 一四五
 (338) 亡妻との交通 一四五
 (339) 照手元 一四五
 (340) 修道院 一四五
 (341) 夫婦 一四五
 (342) 人前 一四五
 (343) 超肉 一四六
 (344) 狂人 一四六
 (345) 地への鏡 一四六
 (346) 美奈子の正月命日(01) 一四六
 (347) 同上(02) 一四六
 (348) 同上(03) 一四六
 (349) 美奈子の正月命日(04) 一四七
 (350) 同上(05) 一四七
 (351) 同上(06) 一四七
 (352) 美奈子の正月命日(07) 一四七
 (353) 同上(08) 一四七
 (354) 満三年の歳月 一四七
 (355) 生統 一四八
 (356) 遺影(01) 一四八
 (357) 同上(02) 一四八
 (358) 遺影(03) 一四八
 (359) 母性 一四八
 (360) 我が旅立ち 一四八
 (361) 月初め 一四九
 (362) 夏休み 一四九
 (363) 無常 一四九
 (364) ベストセラー(01) 一四九
 (365) 同上(02) 一四九
 (366) 我が食事 一四九
 (367) 脚痛し 一五〇
 (368) 亡妻も床伏 一五〇
 (369) 叔父伴院 一五〇
 (370) 謝罪 一五〇
 (371) 感謝 一五〇
 (372) 甘え 一五〇
 (373) 登山 一五一
 (374) 自然の山 一五一
 (375) 愛の山(01) 一五一
 (376) 愛の山(02) 一五一
 (377) 祝哲新築 一五一
 (378) 大樹だく 一五一
 (379) 帰門 一五二
 (380) 父を越ゆ 一五二
 (381) 食中り 一五二
 (382) 他者への重荷 一五二
 (383) 無恨 一五二
 (384) 二人三脚 一五二
 (385) 我は三分の一 一五三
 (386) 入院時の亡妻 一五三
 (387) オリピック 一五三
 (388) 敗者の悲慘 一五三
 (389) 水泡 一五三
 (390) 虚無感 一五三
 (391) 敗者 一五四
 (392) 敗者に拍手 一五四
 (393) 実存の深さ 一五四
 (394) ワープロ文字 一五四
 (395) 無読者 一五四
 (396) 生甲斐 一五四
 (397) 衝動 一五五
 (398) 我が文字(01) 一五五
 (399) 同上(02) 一五五

- (4 00) 自炊(01) 一五五
 (4 03) 生甲斐 一五六
 (4 06) 再婚の旧友 一五六
 (4 09) 我が余生 一五七
 (4 12) 無善 一五七
 (4 15) 俎 一五八
 (4 18) 干し物 五八
 (4 21) 父心 一五九
 (4 24) 敗戦日 一五九
 (4 27) 共生 一六〇
 (4 30) 盆おわる 一六〇
 (4 33) 二重 一六一
 (4 36) 父子並床 一六一
 (4 39) 母の七回忌(03) 一六二
 (4 42) 母の七回忌(06) 一六二
 (4 45) 笑顔 一六三
 (4 48) 比較 一六三
 (4 51) 人類 一六四
 (4 54) 料理 一六四
 (4 57) バス代 一六五
 (4 60) ダイヤの指輪(02) 一六五
 (4 63) 牛乳配達(01) 一六六
 (4 66) 才能 一六六
 (4 01) 同上(02) 五五
 (4 04) ワープロ文字 一五六
 (4 07) 亡妻の悲顔 一五六
 (4 10) 亡母への感謝 一五七
 (4 13) 笑顔 一五七
 (4 16) 迷涙 一五八
 (4 19) オリピック閉幕 一五八
 (4 22) 盆 一五九
 (4 25) 特攻 一五九
 (4 28) 雨漏 一六〇
 (4 31) 雨漏修繕 一六〇
 (4 34) ローンの重荷 一六一
 (4 37) 母の七回忌(01) 一六一
 (4 40) 同上(04) 一六一
 (4 43) 怠惰 一六二
 (4 46) 何時も 一六三
 (4 49) イラク爆撃 一六三
 (4 52) 知足 一六四
 (4 55) 冷蔵庫 一六四
 (4 58) 贅沢は敵 一六五
 (4 61) 同上(03) 一六五
 (4 64) 同上(02) 一六六
 (4 67) 成功 一六六
 (4 02) 同上(03) 一五五
 (4 05) 無読者 一五六
 (4 08) 再婚 一五六
 (4 11) 負目 一五七
 (4 14) 溜息 一五七
 (4 17) 不要物 一五八
 (4 20) 家片付け 五八
 (4 23) 余命 一五九
 (4 26) 台風影響 一五九
 (4 29) 亡妻への呼びかけ 一六〇
 (4 32) 社会保障 一六〇
 (4 35) 賠償金 一六一
 (4 38) 同上(02) 一六一
 (4 41) 同上(05) 一六二
 (4 44) 求めしもの 一六二
 (4 47) 悲喜の愛 一六三
 (4 50) 戦争 一六三
 (4 53) 勿体ない 一六四
 (4 56) 虚しの食事 一六四
 (4 59) ダイヤの指輪(01) 一六五
 (4 62) 同上(04) 一六五
 (4 65) 同上(03) 一六六
 (4 68) 出逢い 一六六